

<資 料>

[授業研究班]

授業マネジメントの効果に関する研究

森 正 明

はじめに

1991年の大学設置基準の大綱化（以下、大綱化）以後、多くの大学でそれまでの一般教育科目を教養教育の一環として捉え、1,2年次に履修させていた科目の年次ごとの見直しが検討され、新たに初年次教育（First Year Experiences）等がカリキュラムの中に設置されるようになった。科目名は、「基礎演習」、「導入演習」、「初年次演習」などで、レポートの書き方や図書館での文献検索実習等を盛り込んだ授業も展開されている。こうした授業の事例として鈴木は、学ぶ意欲を引き出す授業デザインに焦点をあてて、10週間作業学習やグループ学習を行い、その後は学生に授業を担当させる体験をとおして知的好奇心を高め、その後の研究につながる授業実践を報告している¹⁾。

上記のような大学授業を研究対象とした報告は、大学教育学会やFDフォーラム等大学教育を研究対象とした学会や研究会で行われてきた。その中で、授業効果を生むシステムを経営学的な視点で捉え、マーケティングやマネジメントという用語を用いて授業の事前、事後の取り組みを含む活動が授業効果をあげる大きな要因であるのではないかという問題提起が中津井(2006)や美馬の(2006)、高橋(2007)らによってなされている^{2),3),4)}。体育教科目との関連では、木内らが1年次の体育を初年次教育の一環として位置づけ、とりわけ予習として学生が持ち帰る課題に焦点をあて、この課題に取り組む体験が大学1年次の健康生活の意識を向上させているという事例を報告している⁵⁾。

筆者は、これまで事前 → 実習 → 事後というながれを重視し、準備運動の指導の事例や学生によるレクリエーション指導の実態を報告し、その授業効果について検討してきた^{6),7)}。今回他の教科目でも授業効果をあげる重要な要因であると考えられている事前の取り組みや事後の振り返り等が、宿泊を伴う実技・実習授業（以下、集中授業）でも同様に効果をあげること

が明らかになれば、これからの大学体育の一つのモデルとして提示できることにつながる可能性がでてくる。

またFDの視点からも、実施している授業や開講したばかりの授業を対象に、点検・評価していくことが重要で、授業マネジメント評価で使用されているPDCAサイクル (Plan-Do-Check-Act)^{註1)}を参考に、点検・評価を行うことができる。授業効果に関する研究は、調査票による授業クラスの実態把握や比較検討も重要ではあるが、多様な形態で実施されている授業を対象にしてその効果を検討していくことも重要である。そのためには事例研究の視点から報告を蓄積して、多くの教科目や大学ごと学部ごとの特色ある授業を参考に、その後の研究をすすめていくことも意義あることであると考ええる。

そこで本研究では、本学文学部における集中授業 (校外実習を含む) の事例を対象として、授業マネジメントの効果について検討する。

目 的

2008年度に文学部の体育実技で実施されている集中授業 (半期+4泊5日等) を対象にして、授業マネジメント (ここでは、事前・事後の取り組みを含む授業内容) の有効性とその効果について検討する。

手 続 き

文学部授業の概要

文学部では、1992年から30数年間昼間部の学生に開講していなかった (半期+4泊5日) 集中授業 (それまでは、3泊4日の水泳や、スキーの授業をシーズンコースと呼んでいた) を開講した (キャンプとスキーの2種目)。その後、学部改革に連動して一時共通科目で開講したが、履修者の受講保障ができないことに配慮し、2000年から体育実技科目へ戻し現在に至っている。文学部の保健体育科目は、講義 (前期2単位、5.5コマ) 実技 (通年1単位、36コマ) を学部の必修科目として開講し、体育実技は、研究基礎 (1) (2)、各2単位、外国語科目2科目 (各2単位)、基礎演習 (1) (2) (各2単位) と共に、2年次までに修得しないと3年生に進級できないスクリーン科目として位置づけられている。

集中授業は、キャンプ、トレッキング多摩、ゴルフ、テニス、スキーの5種目を開講し、授業費用の学生負担 (1万円以上経費を要する授業には、一律3,000円の補助がある) を考慮し

て、希望者のみが履修することができるようクラス指定からはずした形態で文学部生全体を対象に最初に種目決定を行っている。希望する集中授業が履修できなくても、指定された時間の5～7種目の選択が可能な抽選を実施している。筆者は、こうした抽選方法も重要な授業マネジメントに関わる事項であると考えているので、学部事務スタッフと入念な事前・事後の検討を行っている。

対 象

2008年度から全学部合併授業という形態の授業が開設され、文学部ではトレッキング多摩（以下、トレ多摩）という、多摩地区のハイキングコースを前期の間に縦走するという集中授業を開講した。今回は、このトレ多摩と2002年から（前期+5泊6日）開講しているキャンプの授業を対象にして、授業マネジメントの実態と授業効果について検討する。

事例1) トレッキング多摩

表1 2008年度「トレッキング多摩」授業進行表

定時（学内）授業；水曜4時限			
第一体育館内バスケットコート			
第一体育館内A教室			
第一体育館エリア屋外バレーB			
運動着，運動靴，タオル，帽子			
集中（学外）授業；			
	日 程	コース	備 考
1	4/27	峰の薬師コース	
2	5/25	陣場山コース	前日からナイトハイイク（希望者）
3	6/8	生藤山コース	
4	7/6	浅間尾根コース	
5	夏休み 1泊2日	大岳・日の出コース	テント泊，野宿（希望者）
6	夏休み 1泊2日	棒ノ折コース	旅館宿泊
交通費；実費負担			
食料費；実費負担			
実習費；保険代，宿泊費，記録費，雑費（適時徴収）			

2008年度のこの授業は、前期水曜日の3時限目に関講し事前準備としての理論は、教室で行い実施に関わる用具や持ち出す器材の点検やコンパワーク等の必要な技術を修得し、予定の縦走コースを日曜日（4回）に歩き、残りのコースを夏季休業期間に1泊2日（2回）で歩いた。各回の取り組みについては、実施後の授業で点検を行い、課題文を書かせ次のトレッキングの参考とした。後期に授業のまとめとして、教室授業を実施し会計報告、報告書の配布(CDROM)等を行い終了した。

事例2) キャンプ

表2 2008年度 文学部 体育・スポーツ(実技)「キャンプ」授業進行表

	日 程	主な授業内容	集合(雨天のとき)	備 考
1	4/9	ガイダンス	第一体育館バスケット	
2	4/16	Ice Break① 自己紹介	屋外バレーB (第一体育館バスケット)	
3	4/23	Ice Break② イニシアティブ・ゲーム	屋外バレーB (第一体育館バスケット)	
4	5/7	キャンプの基礎知識・技術① ロープの結び方	第一体育館倉庫前	【細引き】10mを各自で購入、持参。
5	5/14	キャンプの基礎知識・技術② タープとシェルター(設営・撤収)	第一体育館倉庫前	【細引き】持参。
6	5/21	キャンプの基礎知識・技術③ テント(設営・撤収)	第一体育館倉庫前	
7	5/28	キャンプの基礎知識・技術④ コンロの使い方(調理実習)	第一体育館倉庫前	【食材】【食器】【軍手】 授業開始 12:40
8	6/4	キャンプの基礎知識・技術⑤ 地図とコンパスの使い方	屋外バレーB (第一体育館バスケット)	プログラム費 ¥8,500(予定)支払い。
9	6/11	キャンプの基礎知識・技術⑥ 野外活動と気象、被服、個人装備	第一体育館A教室	
10	6/18	キャンプの基礎知識・技術⑦ 安全管理、マナー、自然の接し方	第一体育館A教室	
11	6/25	予備日 内容;(前の週に指示します)	前の週に指示します	
12	7/2	キャンプ実習の計画と準備① 班分け、係分け	第一体育館A教室	宿泊・食費¥27,000 (予定)払い込み。
13	7/9	キャンプ実習の計画と準備② 装備計画、その他	第一体育館A教室	
14	7/16	実習の最終打ち合わせ	第一体育館A教室	

◆【集中】(キャンプ実習)
期 間：2008年9月15日～9月20日(予定) 5泊6日
場 所：長野県野尻湖周辺
費 用：概算27,000円(宿泊費・食費<12食>)+8,500円(プログラム費)
交通費：実費負担

◆【定時】(大学での授業)準備するもの
運動着、運動靴(外履き)、筆記具、クリアファイルA4、帽子、タオル類、上表備考欄記載物

表3 <キャンプのしおり>作成に向けて

用紙サイズ—A4版（縦置き，横書き）

ボリューム—2～3枚

注意点—①簡潔な文章（箇条書き等），ワープロ作成

②図表・写真等を用いてビジュアルに作成

③「考察」を必ず入れる

④参考・引用を明らかにする

※成績評価の一部とします（下書き，面接，最終稿＝以下のステップ全てが評価対象）。

<作業の流れ>

下書き作成



面接

6/23（月） 16：30～18：30

6/25（水） 17：00～18：30

<3号館6F研究室>



提出（1回目）

6/30（月） 18：00

<3号館6F研究室>



返却

7/2（水） 授業時



修正・清書



提出（2回目）

7/7（月） 18：00



しおり印刷・製本

7/9（水） 授業時

※面接時に下書きを持参すること

（少なくとも“項目”をリストアップし，大まかな下調べを完了していること）

※最低1回は面接は受けること

2008年度の授業は、前期水曜日の4時限目に開講し事前準備としての理論は、教室で行い実施に関わる用具や持ち出す器材の確認、コンパスワークやテント張り、調理実習等を行って9月15日から5泊6日長野県のYMCA野尻湖キャンプ場で実施した。この期間内に1泊2日で、火打山の登山を行った。

結果と考察

事例1) についての担当者評価

<トレッキング多摩>

東京都の山岳部を徒歩で縦断する過程で、初歩的な登山技術をマスターし、活動地域の自然環境や歴史文化について学ぶことを目的としている。キャンプ同様班編成をし、その中で係を決めて仕事の役割分担を行った。活動内容もテント泊が含まれるため、宿泊用具や調理器具など管理が必要となる。全コースを6区間に分けて歩いたが、1区間を歩き終わるごとに課題文の提出を求め、提出を受けた後に教員がコメントを付して返却した。1回目の課題は「衣料、装備、食料、団体行動についての評価点と課題点」、2回目は「雨中のトレッキング前に感じたこと、トレッキング中に感じたこと、トレッキング後に感じたこと」、3回目は「トレッキングにおけるリーダーとフォロアーの役割」などである。継続型の授業では、1回1回の積み重ねが大切なので、問題点を修正しながら次回につなげるように工夫した。

*授業終了後、首都圏自然歩道連絡協議会（東京都）からの『踏破証』を全員が受け取り踏破が認定された。実施した授業内容が『踏破証』というかたちで第三者評価を受けたことになる。

事例2) についての担当者評価

<キャンプ>

キャンパー（参加者）がそれぞれの役割を担いながら運営していく『組織キャンプ（organized camp）』を行っている。全体を、いくつかの班（7～8名で構成）に分割し、各班の中で班員が次に示すような役割を担う（一人一役）。

- ・班 長（1名）——班の取りまとめ、渉外
- ・会 計（1名）——予算立案と会計報告（宿泊費、交通費、食費、保険代など）
- ・装備係（2名）——キャンプ用品、登山用具等の管理（点検・荷造り・搬送など）
- ・食料係（2名）——野外炊事メニュー（立案・購入・搬送など）

・生活・衛生係（1名）——救急薬品の準備・管理，班員の健康状況の把握，衛生にかかわること

・記録係（1名）——気象予報の把握，行動記録，撮影，報告書づくり

自然環境の中で生活しながら様々な自然体験学習を行うキャンプでは，他のスポーツ種目に比べ多くの用具を使いこなすことが必要となる。野外炊事でマキを作るためのナタやノコギリ，ナベ，ハンゴウ，鉄板などの調理器具，宿泊用品としては，テント，タープ，マット，シュラフなど，その他，ガスバーナーやランタンなどの火器，地図やコンパスなどなど，用具の使用法については授業の中でしっかりと指導しているが，実際の使用にあたってはこの他に，それぞれの用具に破損や不具合がないかを点検した上で荷造りし，搬出する必要がある。例えばテントは，本体，フライシート，ポール，ベグの部材で構成されるが，これらの部材一つ一つを事前に入念にチェックしなくてはならない。テントについて学習するということは，ただ単にテントの設営・撤収方法について覚えれば足りるということではなく，部材の管理方法や破損がある場合には修理方法を学ぶことでもある。食事作りにしても，メニューを立てたら，必要な食料品をどのように購入・手配するのもかも検討しなくてはならないし，どのような食料装備が必要かも併せて考えなくてはならない。授業時間内に全ての作業をこなすことは難しい面もあるので，そのような場合には各系の学生と面談し作業をすすめる。

キャンプ実習前に作成する「キャンプのしおり」は，実施要項の他に，「キャンプの豆知識」のような形でキャンパー（参加学生）が下調べした各種の情報を掲載している。原稿作成の過程で，教員と面談することを義務づけている。

また，事後には，行動記録や感想文，写真などを掲載した報告書を作成している。

事例1)については，日帰りコースの準備は，毎週水曜日に行われる定時の授業時間中心に取り組み，1泊2日のコースにおいては，学外授業前日と翌日を準備日と，後片付け日として活用している。表1の授業進行表は，学内授業と学外授業（日帰りと1泊2日）の日程を示したものである。定時の学内授業は，学外授業の準備と次の学外授業のために前回の反省を生かした再プランを企画する時間として役立っている（資料2，3参照）。こうした取り組みは，実習全体の授業効果をあげるための取り組みであることはもちろんであるが，何よりも突発的な事態に対応できるリスクマネジメントの一つとして，極めて重要な取り組みでもある。

授業マネジメントの評価の基準として考えられているPDCAサイクルで見ると，P（Plan）にあたる事前の取り組みにかなりの時間を費やして取り組んでいる。特にコース設定に際しては，学生に提示する以前に担当者の下見が必要である。その上で安全なルートを決定する。日

曜日を利用したトレッキングのための準備を大学の授業時に実施し、実習に必要な参考書等を利用した資料収集や食料等の購入は日常の生活時間の中で行われる。大学の実習授業形態の解釈は、実技・実習はD (Do) を中心とした活動でありそのための予習時間が加味されていないために、講義形態とは単位換算基準が異なっているが、トレ多摩のような形態の授業では予習にあたる事前の自己学習時間等が含まれていると考えることができる。次に学外実習D (Do) にあたる取り組みがトレッキングである。ここでは、当日の天候が参加学生の心理面に与える影響等についても考えさせる絶好の機会となった。また、各回のトレッキングを通しての反省や課題を振り返らせ、次回につなぐ手順をとっている。

今回は、このような授業形態で取り組んだ1回目の授業であったので、今後に向けてのケーススタディ的な要素も含んでいる。

この授業が打ち出したテーマは、本学の体育の授業では対象としなかった地域のトレッキングコースを踏破することに取り組んだことにある。多摩の地に移転後30数年を経過して地域の自然を授業テーマの中心に置いたことが特色である^{註2)}。そしてこの体験を通して学生が、地域から学ぶ多くの教材を発見し、その後の学習に役立てるなど、これまでの実技科目では経験できなかったことが学習できた。定時の授業と学外授業での体験をその次の学外授業に反映して取り組むというながれが、重要であることが明らかとなった。このながれは、PDCAサイクルの視点からみても、大いに授業効果をあげる要因であったといえる。その意味で、今年度の授業目的は達成したといえるが、日曜日の実施時期や実施回数の妥当性等の課題については今後精査し、より良い授業となるようさらに検討を加えて取り組むことになる。

事例2)のキャンプは、1992年以来、継続して開講している授業である。キャンプ授業の特色も、トレ多摩同様、実習のための準備内容が授業全体の成果をあげる大きな要因である。このことは、これまでの授業報告でも取り上げてきたが、FDの評価や授業効果をみる基準として用いられているPDCAサイクルの視点からも重要な取り組みであると考えられる。表2の授業進行表にもあるように必要なキャンプ技術の実習は、定時の学内授業時に行い、キャンプ技術論や地形や地域の文化等の資料収集は、宿題として各自が学内授業時以外の時間を使って取り組んでいる。また作成中の資料は、担当教員がチェックするというきめ細かな点検も行われている(表3、資料4、5参照)。さらにこの授業では、4年前から2,500m級の火打山の登山を授業内容に入れたことにより、事前の準備にかかる時間や取り組みの重要度が増した。実施している9月の中旬は、明け方摂氏0度近い気温になることもあり、寒さ対策や登山道を安全に歩くための靴の必要性を事前授業で十分に理解させ、万全を期して授業に臨ませることが不可欠である。現地での最終確認時には、防寒具等のチェックを行い、不備な場合には現地で

購入させることもある。厳しすぎるようでもあるが、用具の不備は最悪の場合、命に直結することもあるので妥協せずに実施している。また火打山キャンプ場のトイレは、環境保全の関係でバイオトイレなので、トイレに使用した紙類は全て持ち帰りとなっている。この体験は、全員が初めてのことなので始めのうちは戸惑いもあるようであるが、最終的には環境への配慮に対して身を以て体験する良い機会となっている。この登山計画のために、多くの時間を割いて事前授業内容が組まれているといえる。準備P (Plan) 8割といわれるキャンプ授業の重要な取り組みでもある。団体装備、個人装備の意義や使用方法を理解して実習に向かわせることが、授業マネジメントの視点からも重要である。実習時D (Do) としての取り組みは、天候の判断や最終的な判断を全て学生にゆだねることはできないが、様々な場面で学生自身がより良い判断をして行動ができるよう、トレーニングを積むことも必須事項である。

他には、キャンプを実施している長野県野尻湖周辺の地域研究という視点から、地元のそば屋に依頼して「そば打ち体験」を実施している。この体験は、そば打ち指導を行う主人の見事な技術に感動することはもちろんのこと、そばを育てよい水を使うことによっておいしいそばが出来上がる過程にも理解を示す、貴重な体験となっている。このプログラムとの関連は、事前の「しおり」作成と連動している（表3参照）。各自が一つのテーマを設定し資料収集をすることになっている。そのテーマの中に郷土食や地域の歴史や文化について取り組む学生がいるので、実習はその応用編としての役割を果たしている。

事後の取り組み例としては、このキャンプ授業での個人や班、係ごとの活動をふりかえる報告書作成がある。事前に行う学内授業から始まり、実習中の総括、そして事後の反省を含めた活動内容の記録である。この報告書は、受講学生の総まとめとしての機能も果たしているが、次年度以降の学生の参考資料としても貴重な資料であり、年度をまたいだ役割を果たしている。他には、会計が学生に関わる雑費の担当をしているので、事前の買い出しや集金、そして事後の会計報告と返金まで、長い期間に亘って携わっている。ここにも、事前→実習→事後というながれの中で活動している実態を確認することができる。こうした一連の流れを考慮した取り組みが、PDCAサイクルで説明される授業マネジメントに配慮した取り組みであるといえる。

まとめと今後の課題

大学教育において授業効果に関する経営学的な視点からの取り組みが始まったのは、前述のごとくであるが、多くの大学の授業では、必ずしもこうした視点からの取り組みが受容され、

きめ細かな授業マネジメントが実施されているとはいいいがたい。その理由は、種々考えられるが特に今回取り上げたトレッキングやキャンプを教材とした授業の開講は、他の大学では数多く開講されていないことにも起因している。これまでの集中授業は、どちらかという実技実習時間活動を中心とした授業形態で実施されてきた傾向がある。これまでの授業も実習時の技術や体力の向上がはかられ、仲間づくりができた等の実績をあげてきたと考えることができる。しかし、集中授業こそ事前や事後の取り組みと一体で捉えさせることが重要であり、そこには学生にとって多くの発見やその発見に対する問題解決につながる体験ができる要素を多く持っていると考えられる。その意味でも、これまで積み上げてきた授業実績に加味するかたちで、事前に理論を学習し、必要な準備等の取り組み（Plan）を行い実習（Do）に向かう。そして、その点検・評価（Check）を実施し、次の授業（Act）につなげていくPDCAサイクルの視点からの取り組みが、授業効果をあげていくことにつながっていくといえる。今後は、集中授業で展開できるマネジメント要素を有効に生かした授業計画が、多くの集中授業で検討されても良いのではないかと考えている。

今回事例として取り上げた文学部の授業でも、これが最善の取り組みであるという状況ではなく、これまで以上に配慮が行き届いた授業内容にするために授業の事前・事後の取り組みが不可欠で、特に事前授業に多くの時間を割いてでも準備することが、実習期間の授業成果につながると考えられることから、いかに準備が大切であるかということを意識させる取り組みから始めることが重要である。このことは、担当者である教師のみならず何よりも受講学生に意識させて取り組ませることが必要であり、そこから他者とのつながりや自然への配慮や畏敬の念が生まれてくるのではないかと考える。

今後は、今回取りあげた事前 → 実習 → 事後という授業マネジメントのながれをとおし、成果をあげる取り組みの点検・評価を実施し、授業効果をあげる授業マネジメントのモデル提示を行っていききたいと考えている。

* 今回の原稿については、授業研究班主査の森研究員が、同研究班の布日研究員からの提出資料をもとに出筆した。

註1) 典型的なマネジメントサイクルの一つで、計画（Plan）、実行（Do）、評価（Check）、改善（Act）のプロセスを順に実施する。業務改善活動を継続的に行うための手法であり、FDの義務化に伴い大学教育の授業評価等でもこの手法を用いて検討されることが多い。大学教育学会等では、5年前から様々な授業の取り組みを評価する手法としてこのサイクルを用いて検討した報告がなされている。

品質管理の父といわれるW. エドワーズ・デミング（Dr. William Edwards Deming）が提案した手法。
註2) 全学の専任保健体育教員の組織である、保健体育教科運営委員会の下部組織として教務分科会があ

りそこでの議論で、単一学部の授業だけではなく全学部合併形態の授業を開講し、さらには多摩の地域を対象にした内容の授業開講の検討を2006年から開始した。1年間の検討後、2008年から文学部の「トレッキング多摩」と商学部の「スイミング（上級）」が開講された。

参考文献

- 1) 鈴木誠, 学ぶ意欲を引き出す授業デザインとは何か?, 第26回大学教育学会, 2004.
- 2) 中津井泉, 学生が伸びる大学教育シンポジウム—変化する学生と社会, 変化せざるを得ない大学—, リクルート『カレッジマネジメント』編集室, 第12回FDフォーラム報告集, (財)大学コンソーシアム京都, 2006, 27-51.
- 3) 美馬のゆり, 学習共同体の構築とその維持—日常に埋め込まれたFD—, 第13回FDフォーラム報告集, (財)大学コンソーシアム京都, 2008, 3-3~3-9.
- 4) 高橋伸一, 京都精華大学(芸術・人文系大学)のFD活動—FDマネジメントサイクル構築を中心に—, (財)大学コンソーシアム京都, 2007, 154-157.
- 5) 木内敦詞, 中村友浩, 荒井弘和, 健康行動実践力を目指した大学体育授業—授業時間内外の課題実践を用いて—, 大学教育学会誌 25(2), 2003, 112-118.
- 6) 森正明, 授業効果に関する研究—準備運動(ウォーミングアップ)についての事例—, 中央大学保健体育研究所紀要 第9号, 1991.
- 7) 森正明, 授業効果に関する研究—レクリエーション指導の事例—, 第41回日本体育学会報告, 1998.

資料1 2008年度『トレッキング多摩』学外集中実施要項

日程表；			
	日 程	コース	備 考
1	終了	峰の薬師コース	
2	終了	陣場山コース	前日からナイトハイク（希望者）
3	終了	生藤山コース	
4	7 / 6	浅間尾根コース	
5	8 / 30	<準備>装備・食料計画	10：00 第一体育館ロビー
	9 / 1 9 / 2	大岳・日の出コース	大岳キャンプ場にテント泊
6	9 / 3 (9 / 4)	<片付け>テント干し <準備>装備・食料計画	9 / 3 10：00 第一体育館ロビー (9 / 3に終われば, 9 / 4は無し)
	9 / 10 9 / 11	棒ノ折コース	奥多摩「荒沢屋」に宿泊

●大岳・日の出コース（テント泊）集合；JR武蔵五日市解散；JR御岳
 宿泊費；実費負担（¥300）
 幕営料；実費負担（1張＝¥1,000）
 鍾乳洞入場料；実費負担（¥500）
 交通費；実費負担
 食料費；実費負担
 保険費；実費負担
 引 率；4名

●棒ノ折コース（旅館泊） 集合；JR御岳 解散；JR奥多摩
 宿泊費；奥多摩「荒沢屋」1泊2食付（¥6,925）
 交通費；実費負担
 食料費；実費負担
 保険費；実費負担
 引 率；4名

資料2 諸連絡（1）

◎学期末レポート；

「自然保護・環境保護のためにどのような取り組みが大切だと考えますか？」

- ① トレ多摩でのこれまでの経験を踏まえて考えてください。
- ② 特に、野外（アウトドア）における行動主体の立場からどのような取り組みが可能か、考えてください。
- ③ 参考図書として次の書籍を読むこと。
野口健著、「富士山を汚すのは誰か」、角川oneテーマ21（2008年）

- ※提出期限 7月31日(厳守)
 提出方法 電子メール 担任宛
 注意事項 本文公開・評価対象
 読后感想文ではありません。上記①②が中心となります。
 ③は必読ですが、あくまでも参考図書です。

◎連絡事項；

『回収したゴミは、自宅まで必ず持ち帰り(駅のゴミ箱などに捨てない)、適正に処分してください。個人でどうしても処分できないものは、7月9日の授業に持参してください。協力をよろしくお願いします。』

1. 次回授業 7月9日 第一体育館A教室 着替えなくてよい
 持ち物：1,000円(保険他)、コンパス、鈴、コッフェル、バーナー、ガス、スタビライザ、薬
 ※コッフェルは洗浄後、水をよく拭き完全に乾燥させておくこと。
2. 行動記録 7月8日迄に上記メールへ(記録係)
3. 食料記録 ♪ (食料係)
4. ゴミ記録 ♪ (班長・副班長)

資料3 「トレッキング多摩(棒ノ折)」諸連絡

宿舎到着後

↓	入 浴
18:45	
19:00	夕食(食堂)
20:30	むかし話(囲炉裏)
23:00	消 灯

1. 宿舎での生活について
 - 1) 禁止事項—無断外出, 未成年者の飲酒, 指定場所以外での喫煙, など.
 - 2) お願い—中央大生としてふさわしい行動・態度を心掛けよう.
 - 3) その他—部屋では清潔な服装で, 避難経路確認, 部屋の入れ替わり(宿泊メンバーのトレード)は避ける, トレッキングで出たゴミは持ち帰る.
2. 貸出装備の返却について
 - 1) 鈴・コンパス—夕食時
 - 2) シュラフ—9月22日(月) 12:45~13:15 第一体育館教員控室
 該当者; 4名
3. 行動記録・感想文の提出について
 - 1) 行動記録—各ポイント(概念図参照)の着・発時間
 - 2) 感想文—トレッキング多摩(全般)を通して, あなたは, <何に気づき>, <何に心を動かされ>, <何を身に付け(獲得し)>, そして, <どのように変わった(変わろうとしている)か>
 - 3) 提出先—担当教員
 - 4) 期 限—9月15日(祝)
4. 報告会について

必ず出席すべし!!

- 1) 期 日—10月15日(水) 4時限
- 2) 場 所—第一体育館A教室
- 3) 内 容—会計報告, 報告書(CD版)配布, 完歩証明書授与(予定), その他

以 上

資料4 各班の係表

=班長=

- ◆野外活動中の事故(判例研究)と安全管理
- ◆キャンプのマナー

=装備=

- ◆登山(パッキング方法と役立つ小物類)
- ◆飯ごうの使い方

=食料=

- ◆かまど(かまどづくり, 薪の組み方)
- ◆北信の郷土食

=レクリエーション=

- ◆高野辰之
- ◆キャンプ・ファイヤーの意義と進行手順

=しおり&報告=

- ◆ナウマン象
- ◆武田信玄と上杉謙信
- ◆小林一茶
- ◆観天望気, 避雷

=生活・衛生=

- ◆熱中症の予防と対処
- ◆救急法(意識不明, 外傷)

資料5 08キャンプ 確認事項

◎ 9月4日(木) 11:00 第一体育館ロビー(終了予定; 13:30)

汚れても良い服装で, 筆記用具と雑巾を持って, 集合!! 大型ザックの貸出しも当日行います。

=“しおり”記載の携行品について=

- 熊よけの鈴 ⇒ 準備不用(大学のものを貸し出します)
- デジタルカメラ ⇒ できるだけ持参してください(特に記録係の人)

=参加者個人に対して=

- 携行品準備
※要項の携行品リストのものは必携。キャンプ場周辺で購入できるものはない。【忘れるな!】
- 体力トレーニング
※ジョギング20分以上, 週に最低2~3回の頻度で。登山は決して甘くない。【侮るな!】

- 前期の復習
※特にロープ・読図・コンパス・バーナーの使用法等、「分かる」・「使える」・「できる」が前提。「怠るな！」
- 選択活動・個人別活動のプランニング
※不明なことや相談があれば8月25日までに、担当教員へ
- シャンプー類持ち込み不可
※環境保護のため備え付けのものを使ってね！電源ありませんので、ドライヤーも使えません。
- 体調の管理
※「早寝早起き」
※「頭痛」「目まい」「動悸」はないか？
※心電図検査（結果確認）

=係に対して=

班 長

- 班員の連絡先（携帯電話等）を把握しておくこと。

装 備

- 9月4日（共同装備発送）絶対に欠席しないこと。当日、装備リストを作成してもらいます。

食 糧

- 9月4日に、班の山行食を持参すること（生もの以外）。共同装備と一緒に発送します。

レ ク

- ファイヤーについて計画しておくこと。

記 録

- 報告書（CD）のコンテンツ決定、収集方法について検討しておくこと。
- デジカメ、携帯ラジオ、記録用機材の準備をすること。

生 活

- キネシオテープの巻き方（膝・足首など）を調べて、予習しておくこと。